

2019 年度最高学部 4 年課程卒業研究・2 年課程卒業勉強について

副学部長 遠藤 敏喜

概要 2019 年度最高学部 4 年課程卒業研究は 16 人が 13 のテーマに取り組んだ（個人研究 12・共同研究 1）。2 年課程卒業勉強は 3 人がひとつのテーマに取り組んだ。成果はそれぞれ、論文にまとめられ、2020 年 2 月 22 日（土）開催の報告会で発表された。学生は“いのち”を燃やして研究に取り組んだと表現した。

I. 最高学部の卒業研究と卒業勉強とは

自由学園最高学部生は 4 年課程・2 年課程とも、自由学園での学びの“まとめ”として、最終学年の 1 年間を通して研究活動を行う。研究成果は、論文として纏められ、卒業直前に開催する報告会で口頭発表される。2019 年度は表 1 に示す 14 本の論文が提出された。これらの論文は、一部制限がかかっているものもあるが、自由学園図書館で閲覧・複写可能である。

4 年課程の卒業研究は、3 年次から 2 年間所属する「領域横断研究」「経営実践研究」のゼミナールで進められる。領域横断研究と経営実践研究は 2016 年度 1 年生から順次導入された新カリキュラムの科目で、2019 年度 4 年生はその第 1 期生ということになる。

領域横断研究は、従来の「テーマ別グループ研究」の 6 つのゼミナールを改組して 4 つにしたもので、「フィールドサイエンス」「ヒューマンサイエンス」「データサイエンス」「ライフスタイル」から成る。ただし、2019 年度 4 年生にライフスタイル所属生はいなかった。領域横断研究は、リベラルアーツを土台とする研究である。特定の学問の応用を探求するというよりも、学生の問題意識や興味・関心に端を発することが多い。設定した研究課題の解決のために必要な学問をその都度修得するという意味で実践的である。学生個人と指導教員の閉じた関係だけで研究を進めるのではなく、ゼミナール間、クラス間の交わりからも研究を重ねあう。この姿勢は従来のテーマ別グループ研究のなかで（あるいはそれ以前から）涵養されたものであるが、新カリキュラムでは学問領域を横断する幅広い視野を養うことを強調している。

経営実践研究は、これまでの卒業生の働き方の特

徴を生かした新機軸で、「マネジメント」ゼミナールから成る。自由学園の教育理念に呼応する経営者像を掲げ、人を大事にし、社会への新たな構想を持ちつつ、事業革新に挑戦する次世代経営者、起業家あるいは社会貢献団体経営者たる資質を養う（自由学園 2018）。マネジメントに所属する学生は 3 年次に学外研修（おもに企業インターンシップ）を行うことが義務付けられている。

2 年課程の卒業勉強ならびに最高学部の研究活動全般の特徴については、前号の拙稿（遠藤 2019）あるいは研究誌『生活大学研究』への寄稿（遠藤 2020）を参照されたい。

II. 2019 年度の研究内容

2019 年度の 4 年課程卒業研究と 2 年課程卒業勉強はどのようなものであったか。報告会の予稿集（最高学部 2020）をもとに概要を紹介する。ただし、解釈などに私的バイアスもかかるが、ご寛容いただきたい。紙面の都合上すべての研究に言及できないこともあわせてお許しいただきたい。

フィールドサイエンス

所属する 2 名が 2 つの研究に取り組んだ。

表 1 の 1 番は、自由学園で中高大と 10 年間テニス部に所属した学生による研究であるが、本研究にて、自由学園のテニスコート（人工地盤）の地盤環境・気象状況を、準備期間も含めて 2 年に亘って、丹念に調査した。結果、テニスコート周辺の地下水位流動のメカニズムを明らかにし、経験的に感じていた問題点に対する解決策（地下水と表層水の排水対策）を考案した。

表 1 の 2 番は、中高大での農芸経験を生かして、自由学園所在地である東久留米特産の柳久保小麦

表 1：論文題目一覧

4 年課程卒業研究	
領域横断研究：フィールドサイエンス	
1	自由学園テニスコートの改良を目的とした地盤環境に関する調査研究
2	東久留米産ムギ類の栽培と利用について：小規模な栽培・利用過程への試み
領域横断研究：ヒューマンサイエンス	
3	毛皮と混血：北米先住民メティスを考える
4	“セクシュアルマイノリティ”の構築：対立する正しさの行方
5	手話言語の可能性と現代社会での限界
6	『ONE PIECE』から学ぶ言葉の力：エスノメソドロジー理論から考える
領域横断研究：データサイエンス	
7	ユーザーエクスペリエンスを考慮した学習環境支援ツール
8	トランジションから捉えたバスケットボールの試合解析
9	ベビーマッサージは父親の心理にどのような影響を及ぼすか
10	だてマスクを用いた新たな感情表現方法の考察
11	能の普及活動に関する研究：小学生を対象とした体験授業の重要性
経営実践研究：マネジメント	
12	恵比寿のまちのアイデンティティに関する研究（共著）
13	婦人之友社に見る、雑誌メディア環境の変化とこれから：マーケティングの視点から
2 年課程卒業勉強	
14	服装と心の関わりについての考察：高齢者・最高学部生への調査を通して（共著）

を含む麦類の栽培と利活用を探求した。2 年間に亘って、フツウコムギ、ライムギ・オオムギなどイネ科コムギ連作物の（小規模）栽培実験を学園内の圃場で行い、収穫した植物体の形質調査・製粉実験・粉の利用の検討などを行った。結果、播種時期のずれが成長に与える影響などが明らかとなった。また、麦蛾による食害の経験に基づき、収穫後のムギ類の乾燥や種実の貯蔵の重要性を訴えた。

ヒューマンサイエンス

所属する 4 名が 4 つの研究に取り組んだ。

表 1 の 5 番は、「日本手話」が、言語学の観点から音声と同等の機能があるにもかかわらず、“閉鎖”的言語となっているのはどうしてかを考察している。著者自身も手話を習得し精通しており、手話の言語としての可能性と限界についてもまとめている。結論のひとつとして、手話言語に対応する文字言語がないことを問題点として挙げている。そして、

それは、口話や手話だけというモノリンガルではなくバイリンガル教育を普及させることで打破できると主張した。

データサイエンス

所属する 5 名が 5 つの研究に取り組んだ。

表 1 の 8 番は、バスケットボールの試合を解析するものである。攻防の切り替わりであるトランジションを定量的に表す 2 つの方法が提示され、実際に 2018 年度の関東大学リーグのデータを用いて、解析がなされた。個人のパフォーマンスを議論する従来の手法と異なり、ゲーム展開をシステムティックに分析可能とした。

マネジメント

所属する 4 名のうち 3 名による共同研究と 1 名による個人研究があった。

表 1 の 12 番は、サッポロ不動産開発株式会社と

の産学連携の研究であった。観察調査とアンケート分析から、恵比寿のまちは、複合的な都市空間のなかに、まちの機能やまちの人から醸成されるおしゃれ、上質などのまちの魅力が詰まっていることを明らかにした。

表 1 の 13 番は、自由学園と設立者を同じくする婦人之友社の雑誌部門を対象とする。編集から販売のプロセスをマーケティングのフレームワークから分析し、今後の経営発展戦略と具体的な施策を提示した。

2 年課程

在籍する 3 名全員による共同研究であった。この 3 名は、オーストリアでの世界体操祭ほか、在学中に海外で学ぶ機会があり、そこで感じた服装についての関心を卒業勉強として洗練させた。研究のアプローチは、オランダの新しい福祉の在り方であるポジティブヘルスの手法を利用するもので、高齢者（リビングアカデミー生・高齢者施設入居者）と若者（最高学部生）のふたつの年齢層を対象に、生活様式と服装の関係を調査した。

結果は、マズローの欲求 5 段階説に基づいて語られた。大雑把に述べると、高齢者は生きがいなどの内的欲求から服装選択が変化してゆき、若者は環境などの外的要因に影響を受ける。3 名は、海外に比べて日本人は笑顔が少ないと感じており、服装は生きがいにつながる要素となりうる」と主張した。

Ⅲ. 2019 年度の報告会

毎年年度末に記念講堂で開催される報告会であるが、今年度は、講堂の改修工事のため、女子部講堂で開催された。また、学事日程の改定に伴い卒業式の日程が早まったことから、報告会もまた例年より 2 週間早い 2020 年 2 月 22 日（土）に開催された。折しも国内では、新型コロナウイルス COVID-19 感染が確認され、イベント開催などをめぐり多くの報道があり、報告会の翌週 29 日には安倍首相が国民の不安解消のために緊急記者会見を開いた。したがって本報告会も、来場者を制限し、常時換気をしているながらの開催であった（座波 2020b）。

短い準備期間と世の中の混乱のなかにあって、学



図 2：報告会のフライヤー

生は心を配って報告会を準備し運営した。予稿集（最高学部 2020）には発表する研究内容のみならず、学生の思いがしっかりと込められた。報告会のリーダーを務めた学生は巻頭言にて「自由学園の学びの集大成として、いのちを燃やして練り上げた」と述べている。また報告会のフライヤーには「真理は汝らに自由を得さすべし」が印された（図 2）。

来場者から報告全体に対して次のようなコメントをいただいた（アンケートの一部のみ抜粋）；「共に新しい発見をし、よき学びの一日となりました」（保護者）、「しっかりと内容とスライドで、きめ細かくご指導をされている様子が見えました」（保護者友人）、「どれもレベルの高い報告で感動しました」（元非常勤講師）、「それぞれが時間をかけて調べ、考察し、発表する、その純粋な学びの喜びが伝わってきました」（一般）、「これからの社会変化に対応できる芽ができていないかと期待したい」（一般）、「多様多彩なテーマでした、人権への視点がよかった、地に足をつけた研究でした」（一般）、「生活の中から生まれた疑問を自分のテーマに落とし込んで研究する姿勢がよいと思った」（無記入）。

IV. 評価

研究を終えた学生はどのような感想をもったのであろうか。学生は次のように語っている；「それぞれ取り組んだ研究は違ったが、異なった角度からの意見を出して議論し、ゼミやクラスで共に研究を進めてきた感がある」（座波 2020a）、「論文を練り上げる中で皆が大きく成長できたと思う」（最高学部 2020）、「豊かな人生を送る準備ができたと感じる」（最高学部 2020）。

4年課程卒業研究も2年課程卒業勉強も、提出された論文と報告会での発表の総合評価で成績が決まる。とくに論文は主査1名（これは主たる指導教員が担う）と副査2名（うち少なくとも1名は卒業研究の指導に携わっていない教員が担う）による審査を経る。2019年度は14本すべての研究が合格で、うち1本がS評価、7本がA評価であった。

2019年度も研究は学外に発信された。表1の1番は、2019年9月3日（火）に香川大学で開催された土木学会全国大会・第73回年次学術講演会にて口頭発表された（吉川 2019）。また、表1の7番は、2020年2月29日（土）に日本教育工学会 2020年春季全国大会にて口頭発表されるはずであったが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い大会は中止となった。

V. 結語

本稿では、2019年度の最高学部4年課程卒業研究と2年課程卒業勉強について、その狙い、内容、評価、報告会の特記事項を述べた。

2019年2月に最高学部は、“自由学園リベラルアーツ学会”を発足した。これは単なる教養主義ではない“Liberal Arts”（＝自由になる手段）を探究する学会である。自由学園の基本的理念である“真理における自由”のために、知識の蓄積ではない、問いかける陶冶を大切に（渡辺 2019）。毎年1回、9月に年会を開催し、研究発表と総会が行われる。また、2015年度からは、独立行政法人科学技術振興機構が運営する電子ジャーナル公開システム J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/>)にて、研究誌『生活大学研究』も刊行している。“生活大学”

とは、自由学園創立者が構想された「卒業期のない大学、一生勉強する機関としての新しい“大学”組織」に由来し、それぞれの人生を大きな生ける学校としてとらえる。

自由学園の教育・研究が、今後も学生と教員の密なタッグによって紡ぎあげられ、学会と研究誌を通して昇華し、進展していくことが期待される。

謝辞

この場を借りて、報告会にご来場のすべての皆さまにあらためて感謝申し上げる。あわせて、学生の研究指導にお力添えくださったすべての皆さまに深く感謝申し上げます。

参考文献

- 遠藤敏喜 (2019), “2018年度最高学部4年課程卒業研究・2年課程卒業勉強について”, 自由学園年報 第23号.
- 遠藤敏喜 (2020), “2018年度最高学部4年課程卒業研究ならびに2年課程卒業勉強について”, 生活大学研究 5巻1号, 139-142.
- 座波佑爾 (2020a), “最高学部2年課程卒業勉強・4年課程卒業研究報告会を開催しました”, 自由学園公式ウェブサイト, <https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/kj/64732>, 2020年3月6日公開.
- 座波佑爾 (2020b), “集大成を報告”, 学園新聞 第718号 (2020年3・4月号), 自由学園出版局.
- 自由学園 (2018), 「経営実践研究リーフレット」, 2018年1月発行.
- 自由学園最高学部 (2020), 「2019年度卒業研究・卒業勉強 報告会 予稿集」, 2020年2月発行.
- 吉川慎平 (2019), “フィールドサイエンスゼミの4年生が土木学会全国大会で口頭発表をしました”, 自由学園公式ウェブサイト, <https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/kj/64475>, 2019年9月26日公開.
- 渡辺憲司 (2019), “自由学園リベラルアーツ学会開催のご案内”, 自由学園公式ウェブサイト, <http://www.jiyu.ac.jp/college/blog/info/68930>, 2019年1月17日公開.